

トピックス できごとやニュース

今回5頁です

○総会準備進む

自然カレッジでは今年も**NPOとしての総会**（6月6日開催予定）の準備が進んでいます。
総会では前年度活動報告、決算、役員選出を審議いただき、新年度の活動方針、予算なども報告します。
資料は 5月理事会で承認後、会員皆様に郵送されます。（5月20日頃に到着予定）
資料に 同封の「**出欠の連絡ハガキ**」を必ず投函いただくようお願いいたします

ひと 今回は14期生の中からお二人に登場いただきます

森本洋介さん （14期生 最寄り駅=泉が丘）

1回目の講座が田中広樹先生の「タンポポ観察」。身近な植物ですが、**タンポポに外来種**（西洋タンポポ）があることを初めて知りました。
その後の講座でも次々に新知識を体得？し楽しく参加しています。
最近は体力ダウン気味で、お元気な仲間たちについていくのが精いっぱい。でも、頑張りますのでよろしく！

阪神タイガースやラグビー「クボタスピアーズ」のファン、甲子園ボウルなどアメフト観戦も大好きです。最近はコロナ騒ぎで試合もなく、カレッジまで休講中、ひたすら「忍」の一字の毎日です。



中楠萬壽子さん （14期生 最寄り駅=金剛）

講師の田中広樹先生が「私の本業は、海遊館でのウミウシの飼育と研究です」と自己紹介された時、思わず手をうちました。

大好きなグリム童話の絵本に、「**あめふらし**」があります。主人公を最後に助ける役目でウミウシの一種・アメフラシが登場します。

それで「本物のアメフラシを見たい」と長い間思っていました。海遊館の外部水槽で展示中とのことで、田中先生もご存じなかった絵本を持って出かけました。

海の宝石とも言われる通り、ウミウシは色鮮やかで、多様な姿かたちをしていて見飽きません。

ただ肝心のアメフラシはというと・・・地味、ナマコのような色合い、素手では遠慮したい・・・でも長年の願いは叶いました。



編集部

奇しくもお二人のお話に登場する田中先生、ぜひ「ひと」欄登場をお願いしなくては！

私のイチオシ講座

カレッジ講座の中でイチオシの講座

今回はTUさんより

河口・干潟の生物

会場＝貝塚／近木川（こきがわ）

近木川の干潟再生地（海水と淡水が混ざる汽水湾土）での講座。
絶滅危惧種の生物が棲み、水の浄化にもなると言う『**干潟の環境を取り戻そう**』活動の説明を聞きました。

泥の穴の中から次々と**ハクセンシオマネキ**が出てきてその白扇（片方のハサミが大きい）を横に振る様子は何とも愛嬌がある。
たこ糸をつけた「手作りつり竿でちくわを餌にカニ釣り」は童心に戻って楽しめました。



“STAY HOME”に散歩は不可欠

自宅から歩いて30分少しのところに**観心寺**がある。1300年の歴史をもつ楠木正成ゆかりの古刹であるが、また南大阪唯一の「花の寺」（25番霊場）でもある。広い境内に四季折々の花が咲き誇り、今頃はツツジやボタンが見ごろだが新緑の青モミジも実に美しい。

だがコロナはお寺にも大きな影響を与え、本尊御開帳も大幅に縮小された。ご本尊と濃厚接触（？）しても心配無用であるが自身も拝観を自粛した。お勧めの**精進料理 KURI**も今は休業中だ。

“STAY HOME”が続く毎日、三日市町方面からのどかな観心寺や延命寺周辺を歩くコースはコロナ疲れとコロナ太りを解消してくれる格好の散歩道。お近くの方、散歩コースに一つ如何でしょうか。＊観心寺入山の場合は入山料300円<コロナ対策で16時閉門>



観心寺 太鼓橋

編集部

河内長野駅近くの**日本料理の名店「喜一」**も今は仕出しのみ。期間限定の絆弁当（千～二千元）は美味しい野弁当。車で観心寺を過ぎてなおも山に入ると、千早赤坂の「**山燈火**」は営業中。緑一面の山中で「山里会席」「蕎麦会席」が頂ける。＊山燈火は予約要

野の花このごろ

植物部会のお世話をされるMKさんのお便り



白 赤満開のハナミズキ

25日、春本番の陽気に誘われ、近くの光明池公園緑道を一人散歩。公園で先ず目に飛び込んだのが**赤白満開のハナミズキ**。アメリカを代表する花ですが、最近では日本でも人気で街路樹や公園に多く植えられ、赤花の実生からは白花になることが多いため赤花の苗木は接ぎ木で殖やすそうです。花卉のように見えるものは、総苞（苞葉）で、その中心にある小さな集まりが花。



クロバイの花

同じように総苞が花卉に見えるものに**ヤマボウシ**、**ドクダミ**、**ブーゲンビリア**や**ミズバショウ**があります。

池周囲の自然林の中には、樹冠を真っ白に被っている**クロバイ**の花が目立ち、この時期になると林内では、この木がやたら多いことに気付かされます。樹木では他に**アキグミ**、**カマツカ**、**コナラ**、**アカメヤナギ**等も花盛りで、若葉の新緑とともに楽しめ、絶好の花見日和でした。（M. K）



アキグミの花



編集部

ハナミズキは英語では **DOG WOOD**。理由は樹皮の意汁で犬の皮膚病を治したから？との説。**ヤマボウシ**（日本原産）は花卉の先が尖り、ハナミズキ（アメリカヤマボウシ）は先が丸い。



シメ

4月も順調に鳥散歩しています。先日、枝に止まっているシメを発見。今日はそのシメが、遠くから見ていると土堀しているように見えて写真ではなく動画を思わず撮りました。餌を探してたのかな？

行くたびにホオジロとセキレイに会えます。モズは今月初めて見ました。シロハラはアオジと一緒に居たり、シメと一緒に居る所をよく見ます。一人野鳥部会飽きる前に皆様と一日も早くご一緒したいものです。（KT）



キセキレイ



アオジ

里山だより

毎週 里山に通うMAさんからのお便りです

里山や畑（里地・里山というようです）をうろうろしていると、ハット思ふ光景に出会います。里地・里山は雑草（自然カレッジでは野草と言います）でいっぱいです。野草は同じ種が群生するようですが、その中の「きれいだな～」と感じたもののいくつかを紹介します。



タンポポ

まるでお花畑です。見とれてしまいます。



キラソウ

紫色がきれいです。



トゲミノキツネボタン

光沢のある黄色い花がきれい。
最近増えている外来種とのこと。

地下茎からニョッキ！タケノコの生え方がよく分ります。



レンゲ

田んぼではよく見かけますが、里地で見ると新鮮！



フキ群落

笹を刈り取ると、フキの群生が出てきました。来春のフキノトウが楽しみ！



地下茎から生える

テンナンショウ属（マムシグサなど）には不思議がいっぱい

山歩きでよく見かけるテンナンショウ属。 **テンナンショウ**と**マムシグサ**の区別は難しいが、この近辺で見かけるのは**テンナンショウ**で、マムシグサはまずありません。（講座での講師のお話）

* 育ちざかりは雄株。豊満な体になると雌株に変化（**性転換**）する。

* まず、筒状の苞の上から**雄株**に入った虫は、途中に戻り止めがあるため戻れない。

右往左往するうちにお宝(花粉)まみれになる。やっと、下にある隙間から何とか脱出。・・・しかし

* 次に、花粉を着けて雌株に入ると、**雌株**では苞基部の隙間（出口）が閉鎖されてる。上から入った虫はめしべにお宝を渡しても出られない・・・壺にはまったまま出られない・・・虫は**ご褒美得ずして死に至る**。

* サトイモ科で、実や球根にはシュウ酸カルシウム（毒）がある。（**Y T** さんからのレポート）



夏→秋 実熟して真っ赤に
（少し気味悪い）

苞の内部：ハエは雄株内で花粉を着けて出口より脱出。
雌株に入り、受粉の手助け。しかし雌株には出口がない。

編集部より

竹中光子 中務佐代子 上溝敏子 飯田憲三 kziid@gmail.com 090-6665-3750

GW=GOLDEN WEEK がやってきました。

今年はコロナで外出自粛⇒ **GW=GAMAN WEEK** と言われますね。

皆様の巣ごもりもあって原稿が早めに揃い、今回5ページです。

お便り、写真ドンドンお寄せ下さいませ。

編集部員宅の小庭の山野草。全く手入れ無しでも健気に咲きました。



山口県の山深い友人宅裏山から引っ越し
して15年は経つ**エビネ**です。

じりじりと庭の隅に移動しながら

20株ほどがひっそり頑張ってます。



着生植物の**セッコク**。不思議にも地面に根付いて生き続けています。

25年経っても一株のまま、やっとこの大きさです。（身長25cm）

長い付き合いの草花はとても可愛い。頑張ってる生き抜こうね！（けん）

「薄幸歌人 文体に信念」という記事が、今月16日付けの読売新聞夕刊文化面に載ったのを読まれた人もおられると思う。楫野（かじの）政子さんという研究者が近著で、明治の歌人・石上露子（いそのかみ・つゆこ）の文体を分析して「女性らしい美文の中に反戦の思いや、家父長制への対抗があったと読み解いた」ことを紹介した内容である。

記事には新しい事実も盛り込まれている。それは、露子の全集に収録されている2つの作品が、実は別人の作で、ペンネームを混同したのが原因と明らかにしているのだ。なかなかの労作で、露子に関心のある人はぜひとも読んで欲しい作品である。ちょっと種明かしをすると、この楫野さんは小生の知り合いで、小生が後輩の文化部記者に頼んで、記事を書いてもらったのである。

富田林市の寺内町にある国の重要文化財「旧杉山家住宅」。江戸中期に建てられた木造入母屋造り、瓦葺きのこの豪壮な家は造り酒屋を営んでいた大地主・杉山家の住居であった。有名な話なので、皆さんもご存じと思うが、この家のあるじこそが、露子なのである。

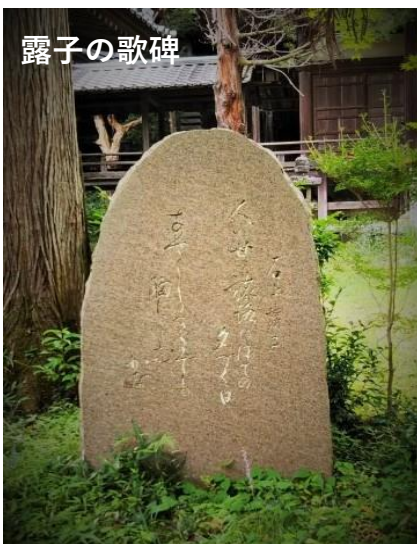
露子、本名は杉山孝（たか）。明治15年6月にこの家の長女として生まれ、昭和34年10月に77歳で亡くなった。幼少から琴や和歌、日本画などを学び、21歳の時には与謝野鉄幹の新詩社の社友となり、雑誌「明星」に和歌を寄稿。与謝野晶子、山川登美子らに並ぶ存在だった。

その露子を一躍、有名にしたのが、大正2年に作家の長谷川時雨が書いた「明治美人伝」。「女流歌人5人のうち、最も美しき女性で、白菊の花にたとえられていた」と紹介したことから、文学青年の間で「露子ブーム」が起きるほどだった。もっとも知られる作品は「小板橋」という詩である。

ゆきずりのわが小板橋／しらしらとひと枝のうばら／いづこより流れか寄りし／君まつと踏みし夕に／
いひしらず沁みて匂ひき（後略）

失った恋を、切々と詠んだこの作品は、戦前の若者の間で広く口ずさまれ、多くの詩集に採録された。実際に、露子の恋は実らず、婿養子を迎え、文筆活動も断念させられた。投機の失敗による家の没落と、夫との別居という不幸な結婚生活。2人の男児をもうけたものの、病気や自殺で先立たれる悲運。そういう境遇から「薄幸の美人」とのイメージが定着した。

露子の歌碑



杉山家の墓は家の近くにあったが、彼女は生前、自分と息子2人の墓を、**河内町の高貴寺**に建てた。ここには近年、歌碑も建立された。その寺を桜の頃に訪ねた。寺は人里離れた山の中腹にある。司馬遼太郎の「街道を行く」にも出てくる古刹。境内は樹木でうっそうとしている。コロナ禍で人影はない。歌碑は講堂の前にあった。さくら色の御影石に刻まれている晩年の歌は――。

人の世の旅路のはての夕づく日あやしきまでも胸にしむかな

時代にほんろうされつつも、自我を通して、強く生きた露子。晩年に見たのは妖しきまでも燃える落日であった。その薄幸の旅路をしのび、そっと手を合わせた。頭上から落花がやまなかった。（渡口 行雄）

